



Title	碩園西村先生年譜
Author(s)	吉田, 鋭雄
Citation	懷德. 1929, 7, p. 95-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88801
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

碩園西村先生年譜

吉田銳雄

是の年譜は、別項所載の如く、内藤博士が其の墓表を撰ぜらるゝに當り、資料を提供せよと命ぜらるゝ儘に、不文を顧みず、濫に其の遺著及び追悼錄などを渉獵して作製せるものなり、固より遺漏の處少からず、且つ其の言行及び著述の如き多く此に記さず、他日更に補正せんを欲す、閱者の示教を得ば幸甚、銳雄謹識

先生氏は西村、名は時彦、字は子俊、天囚と號す、晩年改めて碩園と號す、書室に名けて草不除軒、讀騷廬（楚辭百種を集むるより名く）小天地閣（先賢未刻書を集め其の叢書を作りしより名く）と曰ふ、大隅種子島の人なり、其の先は平行盛より出づ、行盛の子信基といふ、鎌倉の初め南海十二島を領し、世々種子島を治めしが、其孫信眞六子あり、季子信時といふ、始めて西村姓を賜ひ、島の西村小浦に居る、因て氏とす、是れ其の始祖なり、子孫世々宗家に臣事す、九世を時貫と曰ふ、織部と稱す、是れ始めて鐵砲を我が邦に傳來せし人なり、十八世にして嗣絶つ、邑主勳閥を追念し、族子に命じて嗣を承がしむ、是を時貫となす涼風と號す、實に先生の曾祖父なり、配は上妻氏、祖

父名は時之、源五左衛門と稱す、配は鮫島氏なり、父名は時樹、字は子所、大塊と號し、城之助と稱す、天保十二年十二月を以て生る、夙に江戸に上り、業を塩谷岩陰に受け、文を重野成齋に問ひ、鄉儒前田豊山、美坐三山、平山椒垣等と交を結ぶ、詩書易春秋筆記七冊、鈴林一隅、邊防管見殘闕各一冊を著はす（是等の書先生大學に在る時火に遭ひ蕩盡すと云ふ）慶應三年丁卯七月九日歿す、年二十七歳なり、母名は淺子、儒者平山傳一郎（名は武世、字は世伯、西海と號す）の長女にして、平山寛藏、名は武肅、字は子容、椒垣と號す）の妹なり、天保十一年八月二十三日生る、明治五年以前入籍、二子を生む、長は即ち先生、次は時輔なり、尙養女あり（實は淺子刀自の弟高崎氏の女）後弓

削田秋江に適く、

慶應元年^{乙丑}先生年一歳

七月二十三日、鹿兒島縣熊毛郡北種子村西之表七

五八六番地に生る、

同 二年^{丙寅}先生年二歳

同 三年^{丁卯}先生年三歳

七月九日、父時樹熱病に罹りて歿す、享年二十七

歳、母淺子刀自時に二十八歳なり、十月先生の弟時

輔(字は徳夫)生る、

明治元年^{戊辰}先生年四歳

同 二年^{己巳}先生年五歳

郷儒前田豊山(名は宗成、字は子章、讓藏と稱す、

業を薩藩儒宮内維清に學ぶ、先生の生母淺子刀自

の母兄の子なり)に師事して漢學を受く、神童の稱

あり、

同 三年^{庚午}先生年六歳

同 四年^{辛未}先生年七歳

同 五年^{壬申}先生年八歳

同 六年^{癸酉}先生年九歳

同 七年^{甲戌}先生年十歳

同 八年^{乙亥}先生年十一歳

同 九年^{丙子}先生年十二歳

種子島學校(中學程度)に入る、詩文を能くする
を以て縣令より褒獎を受く、

同 十年^{丁丑}先生年十三歳

同 十一年^{戊寅}先生年十四歳

同 十二年^{己卯}先生年十五歳

同 十三年^{庚辰}先生年十六歳

四月笈を負ひ東京に赴き、父執重野成齋先生に謁
し、其の家に寄寓す、成齋命じて島田篁邨の双桂

精舎に入學せしむ、

同 十四年^{辛巳}先生年十七歳

同 十五年^{壬午}先生年十八歳

同 十六年^{癸未}先生年十九歳

東京大學古典講習科漢學課に官費生として入學し、
校内寄宿寮に在り、同窓岡田君格、名取士毅、林浩

卿、瀧川士信等と親み善し、後森川町に下宿す、一日火災に遭ひ、先考の遺稿厄に罹る、因て同窓瀧川士信(名は龜太郎、君山と號す)と共に蓬萊町に住す、七月長井吉徳と共に邵青門文抄を編す、(十月廿一日印行)是れ蓋し先生編著の始めなり、また大成館の囑により十八史略補註を著はす、稿其の第三卷に及びて止む、

同 十七年^{甲申}先生年二十歳

大學入學後、重野成齋主盟の麗澤社、及滄浪社の文會に出で文を作り、重野成齋、小牧櫻泉、中村敬宇、三島中洲、島田篁邨等の批正を受く、

秋、根來天行、重野述夫と共に東海道を経て京攝の間に遊び、轉じて北陸に入り、加の白山に登り、越中富山に同學岡田君格を訪ひ、淹留數日の後歸る「劒雪殘影稿」を作る、

重野成齋の口演に係る「赤穂義士實話」を編す、

同 十八年^{乙酉}先生二十一歳

大學に在り、

同 十九年^{丙戌}先生年二十二歳

大學古典科官費生の廢止により、資なきため出で、再び駿河臺袋町なる重野成齋の家に寄寓す、十七年よりは歲に至る作文二十一篇あり、晚年自ら編せる碩園文稿卷一に收む、自ら言ふ、十九年二十年年間文稿散佚すと、

同 二十年^{丁亥}先生年二十三歳

東京大學古典科を退學し、爾後著述に従事す、日本橋蠣殻町三丁目十一番地に寄寓し、後神田猿樂町二丁目九番地に轉ず、弟時輔、從弟平山武燮と同居す、

三月「屑屋の籠」前篇を作る、(五月原田博文堂印行)九月其の後篇を作る、(二十一年五月印行)また「活鬪體」を作る、(誠之堂印行)野田藤吉郎(後改姓長森)譯する所「英雄の肝膽」、東海散士の「佳人の奇遇」七、八卷、及び「東洋佳人」を批評潤色す、また國民の友載する所「端歌秋の夜」を批評す、是より先生の文名漸く世間に聞ゆ、

同 二十一年^{戊子}先生年二十四歲

四月「奴隸世界」を作る、(同月有文堂印行)、「教師の友」社より「奥羽山水」を刊行す、

九月六日、洋畫家山内愚僊と同じく、東京上野を發し、中山道を游歴す、「雲の行方」(載せて教育報知紙上に在り)及び「木曾游草」(詩)を作る、後名古屋に入り駐杖十日、京都に入り柵屋に寓居す、是れ關西移住の始めなり、

十二月「聾評閨怨」を作る、(十二月書肆東雲堂印行す)、同月「居酒屋の娘」を印行す、

同 二十二年^{己丑}先生年二十五歲

二月先生京都滋賀の間に在り、滋賀縣の「さ」なみ新聞社に入る、

六月十四日大阪公論社に入り、旁ら「新世界」に干與す、(齋藤運藏經營)、中寺町顯孝菴に假寓し、後南區北桃谷二九九番屋敷に移る、弟時輔、山内愚僊同居す、渡邊霞亭(名は勝、字士璋、尾張人)本吉欠伸(名は乙槌、字は子文、豐前人)と交を結び、同人

集「桃谷小説」を刊行す、當時三人俱に桃谷に住するを以て、竊に蜀漢三傑の桃園に比すと云ふ、六月、大阪朝日新聞社に轉ず、初は文藝を擔當し後論説を擔當す、

九月、小説「小夜物語」、「双鴛鴦」を作り、「小説無盡藏」に載す、

十一月、陸海軍大演習賜宴を名古屋行宮に行はせらるゝ時、先生關西各新聞總代として宴に陪し、步廊に列立して、明治天皇に謁す、

同 二十三年^{庚寅}先生年二十六歲

同 二十四年^{辛卯}先生年二十七歲

四月以降、長野圭園、本吉欠伸、渡邊霞亭等と共に同人集「浪華瀉」を刊行し、「天目山」(第一冊に收む)鬼武藏(第二冊に收む)烈婦お六傳(第三冊に收む)獨言(第五冊に收む)老嫗物語(第六冊附録)血刀の記(第七冊に收む)文字香(第九冊に收む)の小説各篇を作る、

八月、「維新豪傑談」を作り之を印行す、同月嚴島

に遊ぶ、

十二月、小説「薩摩嵐」を作り之を印行す、

是歳前後作る所の小説、御身代、醉奴傳、古英雄、

山分衣、金陵勝概、狂人、貳人道中、天縁、無鐵箭、

柚法師、浮浪人、義人譚、女文王、乞丐兒、博奕、

怪男兒、老女村岡、深宋等あり、其の著作年月詳

かならず、

同廿五年^{壬辰}先生二十八歳

一月一日、先生作る所の「脚本天目山」浪花座に上

演せらる、其後「老女村岡」も上演せらる、

二月、小説「平家物語拾遺島内裏の巻」を作り、桃

谷小説に載す、同月隨筆「桃山の記」「觀楓の檄」

「初音」を作り、桃谷小説に載す、十月「小夜物語」

を單行本として印行す、

五月三日、配三原たか子夫人歿す、(夫人歸嫁の年

月未詳)

八月金剛山に上る、

十二月先配たか子の姪女三原幸子を娶る、

同 二十六年^{癸丑}先生年二十九歳

桃谷より西成郡會根崎村二六一〇番屋敷に移居す

四月、朝鮮を経て西伯利亞地方を視察し、浦沙斯

德に福島中佐を迎ふ、

七月、宮根に遊び「福島中佐單騎遠征録」を作る、

(翌二十七年六月出版)

同 二十七年^{甲午}先生年三十歳

朝鮮に東學黨の起るや、六月露領より朝鮮京城に

入り、後、牙山及び平壤の戰に従軍記者たり、「入韓

録」を朝日新聞に連載す、

十一月十四日、外祖母平山優子郷里に歿す、

十二月三日弟時輔朝鮮京城に客死す、時に年二十

八、

同 二十八年^{乙未}先生年三十一歳

三月、郷に歸る、母氏を迎へんが爲なり、

十月、奈良の舊蹟を探る、

十二月三日、弟時輔の「甲午朝鮮陣」一卷を編して

之を印行し、其の序を作る、

同 二十九年^{丙申}先生年三十二歳

四月十二日、母氏を奉じ、内子を携へて芳野山に遊ぶ、芳山記游十絶を賦す、同月大和に天誅組の遺蹟を弔ひ、更に伏見嵯峨に遊ぶ、

九月、南河内の社寺を巡賽す、

東京朝日新聞主筆となる、

公府松方正義に随ひ、九州を歴游す、

冬、微恙あり、内子を携へて大磯に療養す、

同 三十年^酉先生年三十三歳

十二月參謀本部の内命を帶びて、清國武昌及び漢口に至り、湖廣總督張之洞に面會して説く所あり、

「與張制軍論時事書」及び「聯交私議」を作る、また

「天囚游草」(詩)を作る、

同 三十一年^戌先生年三十四歳

四月、清國より歸朝す、「江漢遡洄錄」を作る、

十一月疾あり、二十五日南紀有田に療養し、南游十律を賦す、

重野成齋先生七十壽序(實は七十二)を作る、

同 三十二年^亥先生年三十五歳

四月、前田豐山(時に年六十九)の隱所「櫻雲深處記」を作る、

五月、「南島偉行傳」二冊を著はす(六月印行)

夏、羽前の谷地に再游し、(前游十一年前に在り)最上川を下る、其の地、楨月澗の爲めに「不老亭記」鈴木裕の爲に「弓軒記」を作る、

海江田子爵に代り「忠僕重助碑陰記」を作る、

「紀行八種」を印行す、

冬、大阪朝日新聞社より清國に派遣せられ、南京上海間に留ること二年有餘、

同 三十三年^子先生年三十六歳

是歲八月南京より上海に到り留る、「滬上小詩」を作る、中秋前三日杭州に遊び、「月色潮聲小草」の作あり、また「與劉宮保、論團匪書」を作る、

同 三十四年^丑先生年三十七歳

二月、「賢母遺賢碑」を作る、

同 三十五年^寅先生年三十八歳

四月、支那より歸る、家を携へて櫻島温泉に浴す

是より先生の性格一變すと云ふ、
北區松枝町二一三番地に移居す、

同 三十六年^卯先生年三十九歲

同 三十七年^辰先生年四十歲

同 三十八年^巳先生年四十一歲

同 三十九年^午先生年四十二歲

十月、磯野秋渚と共に「今古歌話」一卷を編して朝
日新聞に連載す、(後其の社より之を印行す)

同 四十年^未先生年四十三歲

夏三たび清國に遊び、滿洲奉天城に重野成齋の歐
洲より歸るを迎へ、後北京に入り、漢口、武昌、上海
を経て歸る、

同 四十一年^申先生年四十四歲

二月十五日、大阪朝日新聞登載の「異彩ある學者」
(四十五回)「龜門の三女傑」(九回)「龜門の二廣」
(四十七回)の三編を脱稿す、

五月廿二日、同新聞所載の「皆川淇園」を脱稿す、

同廿四日、肥薩の游に上り、途郷里に歸る、

六月十五日、桂菴禪師四百年忌辰に私祭を修し、
「桂影詩卷」を輯して一卷とし、其序を作る、

六月「別府溫泉誌序」を作る、

夏高野山に上り、「野山三夜」の紀行文を作る、

七月社友と共に枚方クラハンカ船の游をなす、

同 四十二年^酉先生年四十五歲

今井貫一等と共に大阪人文會を創立す、

七月、「日本宋學史」を著はし、九月之を印行す、

十月十五日より十二月十日まで「尾張敬公」を朝日

新聞に連載す、(翌年三月印行)

廿一年よりは歲に至る二十一年間作る所の文二十
七首を收めて、碩園文稿卷二とす、中に「淀川改修
紀功碑」^六「豊田隆吉墓碣銘」あり、

同 四十三年^戌先生年四十六歲

一月十九日、大阪府立圖書館に於て「五井蘭洲傳」
を講演す、是れ懷德堂師儒諸先生公祭を行ふ端緒
なり、

春歐米各國を視察し、七月歸朝す、

十月「學界の偉人」を著す(翌年一月印行す)
 十月豊後日名子柚軒の爲に「大化帖跋」上野有竹の爲に「喜壽歡集序」、一月中將に代り「龍駕駐蹕記念碑」を作る、

同 四十四年^{辛亥}先生年四十七歲

二月^卯山衣洲等と共に景社文會を設く、同人皆菅廟の側に在るを以て、景賢の意を寓し、毎月廿五日を以て期となし、輪次同人宅に會集す、
 同月高野山に上り、「野山爐頭語」を作り朝日新聞に載す、

七月「懷德堂考」上下二卷成る、(四十三年より四十四年に涉り朝日新聞に登載し、後これを印行す、四十四年三月上卷成り、四十四年七月下卷成る)
 十月十五日、懷德堂師儒諸先生公祭を執行し、「國民道德の大本」を演講す、先生是の時委員長たり、尋で懷德堂記念會を起し、其の財團法人成るに及びて、理事となる、

四十三、四兩年間作るどころの文二十一篇を以て

碩園文稿卷三とす、中に「景社同約」^二「北河内郡戰役志序」^四「送山内愚僊游歐洲序」^六「古處山人遺稿序」^九「公祭懷德堂諸先生文」^十「懷德堂印譜題語」^{十二}あり、

大正元年^{壬子}先生年四十八歲

「莊嚴寺山碑陰記」、「三島氏女墓碣」^{以上}「從六位勳五等柳下君墓石銘」、「故大阪府知事西村君銅像記」^四「決死隊鐵版記」^五「明治天皇誄辭」^九の諸文を作る。

同 二年^{癸丑}先生年四十九歲

是歲以後大阪朝日新聞社の總務局員となり、編輯事務に干與せず、家居して時々論説を起草す、
 六月「譯本琵琶記」を著す、載せて大阪朝日新聞紙上に在り、四月十六日より起り六月二十日に至りて止む)

七月種子島に歸郷、恩師前田豊山を其の鳳蕉園に訪ひ、函丈に侍すること一週日にして歸る、

九月二日前田豊山歿す、享年八十三、先生「嗚呼豊

山先生」の一文を作る、

十月五日、懷德堂記念講演會に於て「本會の宗旨」を演講す、

元年二年兩年間作る所の文廿四篇を以て碩園文稿卷四とす、中に「譯本琵琶記序」^{月六}「伊丹忠魂碑記」^{月七}

「祭豊山前田先生文」^{月九}「文之和尙碑銘」^{月十}あり、

同 三年^{甲寅}先生年五十歲

八月杣山衣洲、土屋大夢と共に城崎に遊び、牧仲舒の病を訪ひ、留連三日、小詩十首を賦す、

十一月十九日、攝河大演習賜餐に列す、

是歲作る所の文廿四篇を以て碩園文稿卷五とす、中に「木村耕巖碑」^{月二}「武石浩玻墓石銘」^{月三}「欠仲居士墓碣銘」^{月五}「大演習賜餐記」^{月十一}あり、

同 四年^{卯乙}先生年五十一歲

五月五日母氏を奉じて高野山に登る 會々開基千百年大法會を行ふ、因て野山雜詩を作る、

十月八日、杣山衣洲の華甲壽筵を中之島銀水樓に張る、

是歲作る所の文二十一篇を以て碩園文稿卷六とす

中に「岡文一郎翁旌德記」^{月一}「左傳續考序」^{月三}「八尾忠魂碑記」^{月四}「贈從五位安井道頓安井道卜紀功碑」^{月七}「贈

正五位河村瑞賢紀功碑」^{月八}「即位大禮頌」^{月十}あり、

同 五年^{丙辰}先生五十二歲

六月梅雨、磯野秋渚、渡邊霞亭、野田九浦と共に南河天見に遊び、杜鵑を聞く、

八月、郷里に歸り、前田豊山の孫女琴子を同里西村時直に嫁せしむ、

九月、京都帝國大學文科大學講師を囑託せられ、支那文學を擔當す（特別講義と作詩作文、古文辭類纂とを講ず）

十月十五日、懷德堂開堂式を舉ぐ、「懷德堂の由來と將來」を演講す、爾後先生は講師を兼ねて、經書の講義を擔當す、（初め、經子簡編、後孟子を講ず）是歲作る所の文二十二首を以て、碩園文稿卷七とす、中に「鐵砲傳來紀功碑」^{月一}「太田蘆隱墓碣」^{月二}「重建懷德堂上梁文」^{月五}「先考五十年祭告文」^{月八}「先師豐

山先生告文同「原田十次郎君墓誌」月九「重建懷德堂
安位開堂告文」月十あり、

同 六年丁巳先生年五十三歲

是歲作る所の文十九篇を以て碩園文稿卷八とす、
中に「力士西海報恩碑」月一「小林卓齋翁墓碣銘」月三「懷
德堂舊址碑」月六あり、

同 七年戊午先生年五十四歲

十月十一日、大阪朝日新聞社の變動により、同月
十七日同社編輯顧問となる、

是歲作る所の文中「薇山西先生墓表」月一「故鹿兒島
市會議長染川君碑」月六「故衆議院議員柚木君碑」月七
「重修若王寺池記」あり、

同 八年己未先生年五十五歲

五月七日、親友籾山季才（名は逸、衣洲と號す）歿
す、享年六十五、

六月十四日在社滿三十年を機として朝日新聞社を
退き、暫時客員となり、十二月に至り客員をも辭す
七、八兩年間作る所の文二十一篇を以て碩園文稿
卷九とす、是歲作る所の文中「吉田吉兵衛記念碑」

月八「芝尾入眞墓石銘」同「柿本定觀墓碣」月十二「上野
母木村孺人事略」同あり、

是歲「屈原賦說」二卷を著す（其の一半は翌年六月より
九月に亘り藝文に登載す）

同 九年庚申先生年五十六歲

三月京都帝國大學文科大學講師を辭す、
五月二十六日、文學博士の學位を受く、

七月島津公爵編輯所編纂長を囑託せらる、
八月二十三日、母淺子刀自八十一回誕辰壽宴を開
く、

十月廿七日、高津小學校に於て、教育勅語下賜三
十年記念として勅語を宣講す、

十二月七日、一族西村時三の三男時教（明治二十
六年十月十五日生）を以て養嗣子とす、

是歲作る所の文十三篇を以て碩園文稿卷十とす、
中に「正六位上野君墓誌銘」月一「故判事吉弘君墓
石銘」月四「池原翁墓碣銘」月六「從六位勳五等右近君
碑銘」同「鶴野古戰場碑」同「五山板天問天對解跋」

月一あり、

同 十年^{辛酉}先生年五十七歲

五月六日、靱山衣洲大祥忌に諸友を會して薦事を修し、追悼詩五章を賦す、

八月三十日、宮内省御用掛を仰付けらる、(敕任待遇)専ら制誥を司る、爾後旁ら宮内省同僚のために論語を、島津公爵嗣子忠秀のために孝經及び日本外史を、島津公爵家職員の爲に唐鑑を講ず、

十月東京荏原郡大崎町字下大崎二三四に移居す、

是歳作る所の文十九篇を以て、碩園文稿卷十一と

す、中に「元帥海軍大將伊集院公墓誌」^{月一}「靈松碑」^{月三}「靱山衣洲墓表」^{月四}「貴族院議員高崎君墓碑銘」^{月八}あり、

同 十一年^{壬戌}先生年五十八歲

九月七日、東坡赤壁游後第十四次とす、因て同人と共に品川海樓に置酒し、詩を賦す、

十一月二十五日先生の父執小牧櫻泉(名は昌業、字は偉卿)歿す、享年八十、先生「小牧先生」の一文を

作り報上に載す、

是歳作る所の文二十二篇を以て碩園文稿卷十二とす、中に「山縣公墓志」^{月一}「正七位岡島君墓碣銘」^{月二}「前田君開渠記功碑」^{月五}「三島開墾紀恩碑」^{月六}「陸軍中將男爵伊瀬知君墓志」^{月七}「正三位勳一等文學博士小牧先生墓誌」^{月十一}あり、

同 十二年^{癸亥}先生年五十九歲

三月一日和歌山縣紀見村、岡寛治長女泰子(明治三十七年九月九日生)を養女とす、

九月二十日、正五位に叙せらる、

斯文會評議員、大東文化學院講師となる、

某會に於て「精神振作の詔書を捧讀して」を講演す是歳作る作の文三十二篇を以て碩園文稿卷十三とす、蓋し文稿之を以て終る、中に「伏見貞愛親王墓志」^{月一}「陸軍大將黒木公墓志」^{月二}「豊田善右衛門君墓碣銘」^{月三}「適齋高野先生墓誌銘」^{月四}「愛甲氏先德碑」^{月五}「校刊論語義疏序」^{月六}「景印延德本大學跋」^{月七}「大阪木綿業記念碑」^{月八}「豊山前田先生紀德碑」^{月九}「如竹散人遺

德碑」同あり、

同 十三年^{甲子}先生年六十歲

一月十日、御講書控を命ぜらる、

五月十一日疾に遭ふ、七月廿九日肺炎、神經衰弱及び尿毒症を併發し危篤に陥る、同月三十日、特旨を以て從四位に陞り勳四等に叙し、瑞寶章を賜はる、是日歿す、越えて三日火化、尋で八月十日遺骨を懷德堂に祭り、後大阪阿倍野瑩域に葬る、

本 堂 記 事

記念祭典 昭和三年十月六日記念祭典執行、文學博士内藤虎次郎先生の「章學誠の史學」と題する講演あり。

教授就任 豫て本堂教授に大阪高等學校教授文學士財津愛象先生を迎ふべく交渉中のところ、昭和四年三月八日正式に就任の承諾を得たり。

財津教授披露宴 四月七日堂友會員並に聽講生を請待し、財津教授披露宴を北濱風月堂に催す。

水曜講義復活 松山教授、稻束講師逝去により水曜の講義を中止したるが、財津教授就任と同時に大阪高等學校教授文學博士秋月胤繼先生を講師に聘し四月十七日の水曜より左の講義を開始す。

大學(秋月博士) 王夢曾中國文學史(財津教授)侍從御差遣 聖上陛下大阪行幸に際し、六月四日午後二時四十分長くも甘露寺侍從を本堂に御差遣相成り、親しく本堂の事業につき聽取せられたり。是の日小倉理事長、今井、木間瀬兩理事、野々村評議員、岡野幹事、財津教授、吉田助教、林講師、堂友會員、聽講生等御出迎へ申上げ、小倉理事長先導休憩室(南小講堂)に御案内、この時侍從より小倉理事長に對し聖旨の傳達あり、小倉理事長謹んで御禮言上の後財津教授より本堂沿革及び事業の概要を御説明申上ぐそれより今井理事の先導にて大講堂に御案内陳列の山階宮晃親王殿下御下賜小刀、白鹿洞掲示、懷德堂內事記、同外事記、同建立記、草茅危言 壁書二枚、竹山履軒畫像につき御説明申上げ記念撮影の後三時十分